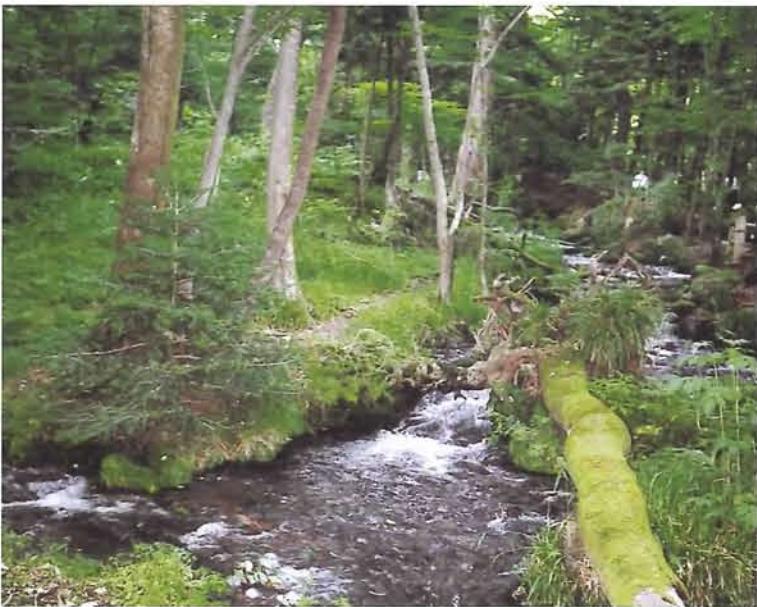


周鳴海の全日本ぶらり旅

栃木県・千葉県編

まだ涼しさの残る北海道から飛行機で1時間、さらに新幹線で1時間。鬼怒川温泉や中禅寺湖、日光東照宮などでも有名な栃木県は日光、那須。暑さ真っ盛りの栃木県、千葉県を訪ねました。



▲樹齢数百年の木々が温かく迎えてくれます。

栃木県那須塩原駅に降り立ちました。「空気が澄んでるなー。」というのが第一印象でした。何となく私の田舎、乙部町に似ている感じです。観光名所がたくさんある栃木県ですが、今回の目的は自然の恵みを再確認すること。まずは

高原山麓に日本一の湧水量を誇る場所があると聞き、塩谷町を訪れました。
那須塩原からバスで約1時間。高原山麓の中腹に到着しました。

「はい、車が来れる所はここまででーす。後は歩いて行つてくださいねー。けつこう遠いですけども、きっと大丈夫だと思いまーす。では気をつけでー:」

少々意味ありげなアナウンスにちょっと戸惑いながら、湧水を汲みに行く皆さんその後についていました。皆さん大きなペットボトルを持っていました。

「この水は美味しいよー。そのまま飲んでももちろん美味しいけど、お茶とかコーヒーを煎れたらはつきりわかるよね。」

一応2本用意した250ml入るミネラルウォーターの空きボトルを持って湧水の場所へ向いました。

途中の景観は、下界とは隔絶されているという感じのとても厳かなものでした。樹齢数百年にもおよぶ原生林におおわれ、広葉樹・針葉樹



▲美味しい水を求めて全国からたくさんの人たちが集います。

の樹海となっているこの森は、保水という自然界のたいせつな役割を担い、常に豊かな水量をたたえる場所となっています。



▲今回ご一緒させていただいた船井幸雄名誉会長と明智平(あけちだいら)です。

ましたが、一緒に緒させていただいた皆さんと楽しく話をしながら歩くこと約20分。目的の尚仁沢に着きました。一瞬川と見間違うほどの量の水がどんどん湧き出ています。

山岳仏教が

盛んな奈良時代には信者が高原山に参拝の折、この湧水で身体を清めるために必ず立ち寄つたそうです。

水温は四季を通じて11度前後。冬でも凍結することもなく、常に自然林全体に潤いを与えてくれるこの湧水は、昭和60年に環境庁より「名水百選の認定」を受けました。

1日の総水量は約65,000トン。さすが日本一の湧水量の尚仁沢はスケールが大きいですね。

栃木県南東部にある益子町は、江戸時代末期から伝わる益子焼きでも有名なところです。どこか懐かしい益子らしさとコバルトを使つた

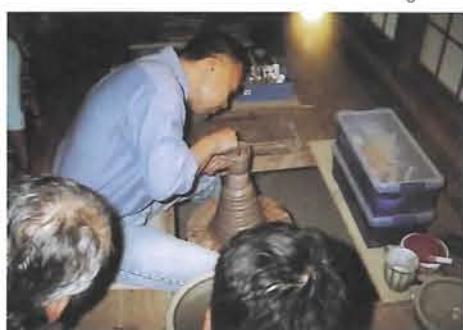


▲『火鳴窯』工房にて浜田英峰さんと。

「それはたいへんな決断でしたね。ご家族の皆さんへの理解も得なければならないし……」

「そうですね、妻子を置いたままの修行を覚悟しなければなりませんでしたから。でも毎週土曜日は車で70kmの道を走り、家に帰りましたよ。途中の道のり70kmを5年間という歳月で割つて今月はここまで近づいた、っていう感じで。また家族と暮らせる日を心の支えに励みました。」

「ご家族の皆さんの協力があつたから、ということですね。私も妻子のある身ですが、その辛さ、わ



▲ろくろで作品を制作中。

ていましてね。参加してみたらもう面白くて。図書館の焼き物の本を全部読んでしまうほど、のめりこんでしまったんです。県芸術祭にも入選するほどになつたんですよ。ところが2年目の県芸術祭では落選してしまいました。ここで私、本格的に取り組むことを決意したんです。妻の叔父の店に人間国宝の島岡達三さんがよくいらっしゃることを聞いていましたので、叔父からすぐに紹介してもらつたんです。でも34歳でしょ。先生も迷つたんじゃないかな。今から修行しても卒業は40歳だぞ、って言われたんです。



「田んぼは耕すもの」という常識を覆し、あえて耕さないことで稲自身の本来持つて いる力を



▲招福猫は胴と頭をろくろでひくため、とても手間がかかるそうです。

す。そのせいか、私の作品には女性のお客さんが
多いですね。」
ひとつひとつ丁寧に心をこめて作り上げる浜
田さんの益子焼き。自然の恵みを活かした、温
かみの伝わる器づくり。たくさんの人たちが浜
田さんの器と出会えますように・・・。

引き出す「不耕起栽培」を実践しているという
NPO法人『メダカのがつこう』の栽培田がある
千葉県佐原市を訪れました。

「耕さなくてもいい田んぼがある?」田んぼは
耕すもの、と思っていた私はちょっとびっくりし
てしまつたのですが、実際ここ『メダカのがつこ
う』ではあえて田んぼを耕さないことで、稻が
本来持つている力を最大限に引き出すことに成
功したのです。『メダカのがつこう』顧問で、日本
不耕起栽培普及会会長の岩澤信夫さんにお話
をお伺いしました。

「私が不耕起栽培の研究をおこなうきっかけにな
なつたのは、1980年から1981年にかけ
て東北地方を襲つた冷害でした。ほとんどの田
んぼが収穫できずにいる中で一部の農家だけが
まつたく被害を受けていないことがわかつたの
です。調べてみるとそれらの農家は昔ながらの
手植えによる農作業をおこなつていました。考
えてみれば北は北海道から南は九州まで、緯度
にして20度も違う場所でも育つているといふこ
とは、本来稻は環境に対しての強い適応力を持
つてゐるということなんです。だいたい自然に生
えている草木は、別に人間が耕したところに生
えるわけではない。土壤の硬いところにも根を
伸ばして生きている。だつたら稻も耕していな
い田んぼで生きていけるはずじやないですか。」
こうして育ててみた稻は、耕した田んぼの稻
よりも大きく、力強い稻になつたのです。



▲不耕起の田んぼにはアカガエルやドジョウなどがたくさん生息しています



こうした生き物たちが生息する自然環境を学校の子供たちにも見せてあ



▲『メダカのがっこう』理事長の中村陽子さん

現し、そこでメダカの育つ様子を見られるようにしたものを学校に提供することにしたそうです。

泡ノ升口ノル
にミニ不耕起



▲耕さない稻の力強さを説明してくれる岩澤さん

んぽにすることで、琵琶湖の水を蘇らせたいと思っています。」「自然に優しく、人にも優しく、それでいて美味しいものをつくる農法」私たちが目指す自然との共生の形が、この農法の中にあるのかもしれません。

「これは凄い！
本当の洞窟なん
ですね。」

A man with dark hair and glasses, wearing a black long-sleeved shirt, stands at a counter in what appears to be a shop or exhibition space. He is facing away from the camera, looking at a display board. The display board features several framed photographs and a circular graphic. In the background, another person is partially visible, also looking at the displays. The setting has a tiled floor and walls covered in various informational panels and photos.

自然そのものを活かした洞窟風呂、そして自然の恵みと愛情がたくさん詰まつた美味しい料理今回のぶらり旅もまた、自然の尊さと人の出会いの素晴らしさを実感させていただきまし

なお今回のぶらり旅は、船井総合研究所様に
多大なご協力をいただきました。

この場をお借りしてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。



▲自然そのままの洞窟風呂

益子燒『火鳴窯』

TEL 0285-72-8364
メダカのがっこう

TEL 03-35569-2312

会津屋
TEL 0287-32-2020